

ライフストーリー

Life Story

vol.66

繊細で美しく、そしてはかない線香花火は、江戸時代から日本人に親しまれてきた。しかし、近年は安価な中国製品に押され、国内の生産量は激減した。「伝統を守りたい」。数少ない職人の一人として、誇りを胸に花火を作る。

眼前で火の玉が輝きを増し、勢いよく火花を散らした。かすかに震えながら光を放ち続けるが、一瞬の後には力を失い、深く地面に落ちた。「一本に花火大会が凝縮されている、とも言われるんです」。線香花火について語る口調は、静かだが力強い。

和紙で火薬を包んだ「長手」と呼ばれる線香花火は、燃焼するわずかな時間に、様々な表情を見せる。輝きを生み出す原動力はたった0.08秒の火薬。何度も調合を繰り返し、美しく火花が散る自信作を作り上げた。

線香花火 情熱の光

国産の誇り 極める一瞬の美



3代目職人 筒井 良太さん 45

火を付けて次第に大きくなる火の玉は「蕾」。火花が散り出す「牡丹」に続き、散る勢いが増す「松葉」。最後は「散り菊」。線香花火が表情を変えるさまは、花に例えられる。「良質の線香花火は四つの変化がきちんと出る。地味なようで実は派手」と言う。

90年の歴史がある筒井時

3人きょうだいの長男。

花火とは違うものづくりの

正玩具花火製造所(福岡県みやま市)の3代目「長手」のほか、西日本で広まったワラの先に火薬を塗り固めた「スポ手」を年間計80万本作る。両方を手がけるのは同製造所だけという。

現場を見たいと、福岡県内の私立高校を卒業し、1992年に愛知県自動車部品メーカーに入社した。プ

おしが営む福岡県八女市の花火工場で、線香花火の製造を手伝ったこともあるが、その工場も廃業し、道具や職人を継ぐことになった。

日本煙火協会(東京)によると、中国製品との価格競争に押され、国産は80年

代から落ち込んだ。都市部では花火をする場所も限られ、子どもが遊ぶ姿も減っていた。

「自分にしか作れない花火がほしい」

まぶたの裏に線香花火の輝きが浮かんだ。点と線、火花の勢いの違いで美しくはかない世界を生み出せる。「最後まで生き残る国産の花火だ」。そう確信し、開発に乗り出した。

長手の黒色火薬は、硝石と硫黄、松煙などを合わせて作る。火の玉の温度は約800度。火薬をくるむ薄い紙が燃え尽きる前に、一気に温度が上がるように調合しなければならぬ。配分を間違えれば、火花のバランスが崩れてしまふ。仕事を終えてから毎晩、研究に取り組んだ。不眠不休の開発は3年間続いた。

自信作ができたのは、2009年3月のことだ。明け方に帰宅し、妻の今日子さん(43)にできたばかりの一本を渡した。火花はくつきりと四つの表情をつくり、勢いよく散った。

「あんなにきれいな線香花火は見たことがなかった」と今日子さんは振り返る。



上が「長手」、下が「スポ手」

「線香花火は、真心に傳らせてくれる」。究極の線香花火を目指して日々研究を続ける(福岡県みやま市で)＝中嶋基樹撮影

プロフィール

1979年創業の製造所を継ぎ、線香花火や子ども向けのおもちゃ花火約30種を手がける。「子どもが知らない、花火は衰退していく。次の世代に残していきたい」との思いから、制作の工程を体験できるワークショップも開催する。家族は妻と3男1女。キャンプや釣りなどで自然に親しんでいる。

「花火を作ることにだけに情熱を傾けている。まさに職人です」。パッケージのデザインなどにかかわっているデザイナーの中庭日出海さん(38)(福岡市)は言う。

「持ち方の角度、気象、配合のバランスと、条件のすべてで咲き方は変わる。職人として、日本で生まれた線香花火に出会えたことを誇りに思う」

花火の季節はまもなく。和の心を伝える制作が続いている。(久保山健)

夫婦でデザインや販売方法を工夫。新製品は、祖父である初代の名前をつけて商品化した「線香花火筒井時正」シリーズに組み込んだ。八女の手書き和紙で作った長手40本とみやま市特産の燗燗の和ろうそく、木工が有名な福岡県大川市の木製ろうそく立てを組み合わせたなどして販売した。

11年に東京のギフトショーに出品したところ、雑貨などを扱う大手企業との商談が成立。最も高いセットは1万円超だが、贈答用として人気が高まり、取引先は百貨店など300を超えた。